

「おじちゃんち」(仮称)が出来るまで

二〇一四、平成二十六年十一月二十九日

社会福祉法人 こひつじ会 市川 益子

久しぶりの職員結婚式、祝辞に「普通の人が一番いい」と言ってしまった。何故か献堂式とダブっていたのかも知れません。

行田の職員の「おじちゃん」こと私の弟はまさに「普通の人」だった。正直で不器用で無口だけど心はいつも人の心に寄り添うあたり前。人を愛する人だったから、人から愛されたと言えるのか？と、それが一番幸せ「普通の人」なんだなと思いました。

子ども大好き、車大好き、自然が大好き、まさに行田で勤務員の職場がピッタリでした。人の為に良かれと思う心と、行いが時には、この世に於いては楽しい事ばかりとは言えない時もあっても、子どもに救われ癒されてとても幸せだったと思う。

亡くなって初めて愛の深さ、大きさを子どもの心の中から気付かされました。子ども達が慕うさまじまなことは、悲しみに思う・行動・等を連絡帳で知ることが出来て、正直驚きそのものでした。

☆大人にはわけのわからない泣く子どもの心の中に、月一度、三年経っても親子で花を持って写真に会いにくる姿☆それを見習って、僕も私もとひとひらを、ひと枝を、雑草をと、毎日持って挨拶する子達の姿☆心の内を手紙にして行く卒

園児達☆中学生、高校生で写真の前で泣く(祈る)姿☆連絡帳へと綴られた保護者の感謝のことば☆職員や保護者が子ども達の夢で会ったと言う姿それ等が具体的現象になって、只々思いがけない主の栄光としか思えません。それに押し出されて今日の目となりました。子ども達の姿、不思議な出来事、これはどう考えてもおじちゃんがいるとしか考えられない。その後のいくつかの出来事。頼んだわけでもないのに。

40周年を祝う年にクラウデアさんをロシアからお呼びした時に関わりのある村尾先生によって絵本となり、不思議な出来事を追記で様々な新聞や講演会で広がり、日本中の子どもから大人、様々な年令、職業、関係なく、こともあるうか宮内庁へ、皇后様へと。三回忌にはおことばを頂く事に、感謝のことばもあります。

そして知人が知人へと広がる中でスイスイリバーの石橋夫妻による CD となったり。在園、卒園児、が保育園へ来たいの声に励まされたり、「月一回でもいいから充電に来ていい？」等々の声に押し出され、導かれるまま増築の夢の実現へと歩み出していました。

土地を得る事から建築許可の為の役所通いは田部井建設(株)の河内さんの忍耐と不屈の精神に励まされた。その間ここにたどり着く間にとってもなく大きい夢にひたったMAN 90 鳴瀧さんを通しての業者さんとの夢は開発課を崩すことは出来ず、実現に至りませんでした。が、必ず時を得て成る日